

la tshal にあつて西部の仏教の元締め stod kyi chos kyi gzhin

dzin たる僧 bande Chos kyi blo gros ㄅ (チベット) の宰相 Zhang Khyi (Khr.) sum rje など、が会合した時点で数えるなら、仏滅後二千九百六十九年になる。」との記事がある。

これは仏滅時を紀元前二二三三年とするもので、上記の数からこの年を差し引けば八三六年となり、年名と一致する。右の僧について別のところ(Ob. cit., f. 316b, l. 3) 'Mar yul ㄅ bande Chos kyi blo gros が計算したものであらうとは一致しないので古い文書を確かなものとみなした。」と示している。この僧はギルキットと云うよりは、大勃律、即ち、バルチスタンから Mar yul ㄅ つまり、ラダックにかけての西部 stod の仏教を総括してゐたもので、当時のチベットで云えば dPal chen po Yon tan のような立場の人物であつたと思われる。現存チベット大蔵経中にはブルンヤ語から訳出された『現觀法門莊嚴經』(北京版カンギル、No. 452) があり、デンカルマ Idan dkar na 目録に見えないのでこれと結びつけて考えることも許される。従つて、慧超の報告をないがしろにしない方がよいのではないかと思われる。

本書にはヨーロッパ人の滞在記録等が申し分なく活用されていることは云うまでもない。一言で本書をまとめて評するならば、ラダック史の決定版が成つたと伝えるであらう。

Luciano Petech: *The Kingdom of Ladakh*, c. 950—

批評と紹介 山崎

1842 A.D., Roma (ISMEO) 1977.

G・P・ウパーディヤイイ著

古代インドのバラモン

—— B.C. 二〇〇年頃～D. 五〇〇年頃の  
A. 五〇〇年頃の

バラモン階級の役割に関する一研究 ——

山崎 元 一

インドに入ったアーリヤ人は、祭式至上主義に立つヴェーダの宗教を傳達させた。この宗教の司祭階級バラモンは、はじめ苦行主義、生殖器崇拜、蛇神・樹神崇拜など雑多な要素を含む先住民の宗教を嫌悪し蔑視してゐたのであるが、やがてそれらの要素を受容しつつ自己を変質させ、渾然一体化した「ヒンドゥー教」の指導者となつてゆく。こうした宗教の變化、バラモン階級の変質は、いかなる社会・政治・経済・宗教的背景のもとになされたのか。本書の目的とするところは、この重要問題の解明にあり、時代的には、主としてマウリヤ朝末期からグプタ朝期までが対象となつてゐる。著者ウパーディヤイイは、デリー大学やハイルトンのアメリカン大

第六十二卷 一五一

学でインド史の講座を担当してきた新進の研究者であり、本書はバナラスリヒンドゥー大学に提出した博士論文（一九六七年）を増補したものである。本書のテーマは評者の専攻領域の外にあるが、興味深い内容をもった研究であるため、「批評」よりも「紹介」に重点を置いて本稿を記した。各章の概容を紹介するならば次のようになる。

第一章「後期ヴェーダ時代の文化伝統（後期ヴェーダ時代から西暦前三世紀頃に至る時代の文化伝統の発達）」

後期ヴェーダ時代に、ガンジス川流域でヴェーダ正統派の宗教が発達した。司祭者バラモンは祭式を独占し、自己の神聖性を強調しつつ王権から独立した排他的集団を形成するに至った。特権階級バラモンを最高位とするヴァルナ制度が成立したのもこの時代である。一方、その東方のマガダを中心とする地方には、正統派から非アーリヤ的で下賤とみなされる人々が住んでいたが、この地には苦行主義（asceticism）の伝統があり、この異端思想を奉ずる諸々の宗派が、前六世紀までにヴェーダ正統派に対する反抗運動に立ち上がった。異端派の中の最有力派は仏教で、ヴァルナ差別や祭式至上主義を否定して影響力を強めた。そして都市経済をバックに隆盛となり、市民（ヴァイシャ）とクシャトリア階級の支持を得るとともに、ブッダ崇拜などを採用して大衆宗教としての性

格を強め、地域の壁を超え地理的拡大をみせるに至った。この非正統派の運動は、アショーカ王の時代に頂点に達した。

第二章「新興の社会・宗教集団による挑戦」

東方に興った異端派の宗教運動に加え、マウリヤ朝末期から西北インドへのムレーツチャ（ギリシア人、インドゥスキタイ族、インドゥパルティア族などの夷狄）の侵入が始まり、さらに非アーリヤ部族民の活動もあって、正統派バラモン文化はいっそう大きな脅威を受けることになった。ヴェーダの権威は失われ、シュードラ王やムレーツチャ王のもとで四ヴァルナ（種姓）制度は混乱した。『マハーバーラタ』やプラーナ文獻に語られるカリユガ（暗黒時代）の描写は、ヴェーダの伝統の危機に直面したバラモンたちの不安、憤り、衝撃の大きさを伝えている。こうした社会秩序や価値観の混乱の根底にはまた、農業や商工業の発達、人口の増大と移動、部族民の農耕民化といった社会・経済的要因も存在した。一方、バラモンの側からも、こうしたカオス状態に終止符を打ち秩序を回復させようという試みがなされている。宗教的にみれば、バラモンは、非アーリヤ的（先住民的）要素の強いバーガヴァタ（ヴァースデーヴァ・クリシュナ）信仰や、ルドラリンヴァ信仰を自己の宗教体系の中に取り入れ、正統派を回生させようと図っている。新正統派（Neo-Orthodoxy）の誕生である。

### 第三章「神学者としてのバラモン（宗教組織の統合化と大衆化）」

異端派に対するバラモン側の巻返しは、ヴェーダの宗教を統合的宗教へと変質させることによつてなされた。こうした試みは、『マハーバータ』やプラーナ文獻のいたるところに見出される。統合化とは、民間信仰の神々をヴェーダのパンテオンの中に受け入れること、換言すればヴェーダの神々の大衆化を意味している。その際に、最高神との合一（神の前ですべての人間は平等とされる）を旨指すヨーガ・バクティの教義や、諸神の統合を可能にするアヴァタラ・ヴェーハの理論などが用いられ、またティールタ（聖地）巡礼、寺院信仰、偶像崇拜など、カーストや性の区別を超えた信仰形態が採用された。在俗信者にも容易に実践しうるバクティ信仰は、仏教の出家主義に対抗するための有効な手段となった。こうしてバラモンは、異端派からの攻撃を退け、大衆を正統派の枠内に包容することに成功したのである。やがて、仏教などの異端派も、新正統派の影響を受けて変質するに至る（例えば大乘仏教）。

新正統派の拡大は、伝道教団を組織して異教徒を改宗させるといふ形態をとつたのではない。それは、異つた部族や集団、あるいは彼らの宗教を、全体として正統派信仰の内部に編入する（部族などの集団はヴァルナ社会の内部に位置づけ

られる）という統合・同化の形で展開した。新正統派の大衆化とともにバラモンの居住分布も拡がり、正統派の価値観は下層民衆にまで及んだ。しかしバラモンは、一方では厳格な身分秩序・父権的家族制度の主張者でもある。大衆化（神の前の平等を説くバクティ信仰）と身分・家族制度との間の矛盾は、自己の生得の義務（svadhama）の教理により巧みに解決されている。またヴェーダの祭式は往時の重要性を失つてはいたが、新正統派の文獻においてもヴェーダの神聖性や權威は強調されている。新正統派の大衆化とともに、ヴェーダの權威は、少なくとも理論の上では一般大衆のレベルにおいても認められるに至つたと言えよう。マウリヤ朝以後の復古主義の時代には、諸王によつて馬祀祭を含む大供儀が復活させられている。これはまた、動乱の時代にはアシカ王的な不殺生主義が意味をもたなくなつたことを語っている。また、主として経済上の理由によるのであるが、バラモンは地理的移動性をもち、この移動性が新正統派の伝播と大衆化に大きな関係をもつていた。

#### 第四章「新正統派——その神々、儀礼、保護者——」

新正統派の最高神であるヴィシヌヌとルドラシンヴァに与えられた複雑多様な属性を検討することによつて、次のことが明らかになる。第一は、農業の発達という経済的背景のもとに、神の属性や儀礼の内容に農業的要素が顕著化すること

である。犠牲獣の肉に代わる農作物の奉獻や、神と水・沃土・農具などとの結合、あるいは男根・母神崇拜の流行などがその例である。第二は、バラモン神学者たちが、部族民の信仰に起源する非アーリヤ的・原始的な信仰の要素（性力崇拜、<sup>カニヒル</sup>食人風習、<sup>オシラ</sup>乱飲乱舞、野生植物の奉獻など）を適度に變形させて受容したことである。バラモンは、正統派の宗教をこうしたシンクレティズムの方向に導くことによって、農業經濟の進展に適合する信仰を育成し、また、經濟的に力をつけてきたシュードラ層や、新たにヴァルナ社会に組み込まれた部族民など、上下幅広い層からの支持を得ることに成功した。こうしてバラモンは、自己の生活の物質的基盤を確保するとともに、社会生活における影響力を強化し、ヴァルナ秩序の維持を唱導しつづけたのである。

第五章 「バラモンと社会（社会秩序の組織化と規格化）」

『マハーバーラタ』、プラリーナ文獻、ヒンドゥー法典などを読むと、異端派や外来民族による正統派社会秩序の崩壊の時代にあつて、バラモンは保守的態度でこれに対処する一方、新しい状況をふまえて社会制度の改革を試みていることがわかる。バラモンは四ヴァルナ秩序の再建によって暗黒時代を終わらせようと図つたが、現実にはヴァルナと職業との関係は混乱しきつていた。理想と現実とのこうした矛盾を説明するために案出されたのがアーパドダルマ *apaddharma* 窮迫時

の法）であり、バラモンはこの巧妙な理論によつて、ヴァルナ制度の基本を崩さずに現実の危機（個人的・社会的文化的な危機）に対処しえたのである。しかし、アーパドダルマによる規定緩和はあくまでも便法とされ、他方ではスヴァールマの遂行が繰り返し奨励されている。

新正統派の文獻では、ヴァルナ制度再建の一環として、バラモンの優位性、清浄性、神聖性がことさらに唱えられている。そして、他ヴァルナとバラモンとの差異を際立たせるために「「眞実のバラモン」のイメージが強調される。すなわち、厳格な倫理と厳しい修行に従い、思索・学問の道に秀で、物質よりも精神を重んずるバラモンへの尊敬が説かれ、プローヒタ（「宮廷祭官）をはじめとする司祭職従事者はそれより低く見做されているのである。しかし、司祭たちは為政者や庶民との接触を通じてヴェーダの宗教の大衆化（新正統派の確立と発展）のために大いに寄与している。なお、王侯によるバラモンへの土地寄進が、土地の開拓や未開民の文化的同化を促し、農業に基礎を置く新正統派文化の拡張に寄与したことも忘れてはならない。

第六章 「社会秩序の組織化と規格化（バラモンとヴァルナ制度）」

部族制度の崩壊は司祭と王との権力を増大させた。まずバラモンは、自己の儀礼的地位の優越を主張しつづつ王権と部族

の双方から独立し、さらに異端派の反抗をも押し退け、本書の対象とした時代においてもこの主張を唱えつづけた。バラモンはまた儀礼的な面で王権の発達に貢献した。すなわち、即位式や馬祭祀をはじめとする祭式を通じて王を部族の制約の外に置き、地上の最高権力者としただけでなく、ヴァルナリアーシューラマ（種姓と任期）制度の守護者としての王を、超人・神格にまで高めたのである。

ヴァルナ制度のもとで、ヴァイシヤは貢納によって上位ヴァルナを支える義務を負っていたが、このヴァイシャ・ヴァルナの同質性はきわめて低く、都市の富裕な商人からシェードラとの区別のつかない下層民に至る雑多な者たちから成っていた。『マヌ法典』ではヴァイシヤの地位と義務との再確立を図っているが、その理由は、こうした現状に対処するためであり、またヴァイシヤの仏教傾斜を阻むためであった。マウリヤ朝以後の時代におけるシェードラの反伝統的攻勢はバラモンの反感を呼んだが、そうしたバラモンも、職人や農耕民として社会的・経済的に力をつけたシェードラを無視することはできなかった。外来民族の同化、非ヴェーダ的信仰要素の包容、異端派との抗争など一般的な状況もまた、シェードラに幸いした。こうしてバラモンは、上層のシェードラの儀礼上の地位や宗教上の権利を部分的にはあるが認めるに至った。

正統派の社会秩序はまた、内部からは婚姻規制の混乱、外部からはヴァルナ社会の枠外に存在する民族・部族の進出、という両面からの脅威にさらされていた。こうした脅威に対処するために考案されたのがヴァルナ間混血（varanmishra）とヴァーティヤ（vratya）の理論である。バラモンはこの両理論により、婚姻制度の無制限の混乱を防ぎ、異民族・異部族をヴァルナ秩序の内部に取り込み位置づけることに成功した。この時代にバラモンは、さまざまな理論や立法を通じてヴァルナ秩序の再編成に尽力したが、そのなかでも、現世の不平等な「生まれ」を前世の報いと説く宿命論的な業・輪廻理論と、生得の義務の遂行により現世・来世の幸福が平等に得られることを説くスヴァールマの理論は、身分社会の固定化に大きく貢献した。

#### 第七章「アーシューラマ（任期）の組織化」

異端的苦行主義の挑戦に対して正統派がとった第一の方策は、人生における第四の任期（遊行期）として苦行主義を包容することであった。すなわち、バラモンの法制定者は、ヴァルナリアーシューラマ制度の中に苦行期を位置づけるという同化・統合の手段によって異端派思想の高まりを鎮め、新正統派を確立することに成功したのである。正統派が採用した第二の方策は、家住期の重視・優先であった。すなわち、この任期を人生における社会的・宗教的・経済的義務を果たす

ための最も基本的な任期として定め、また、第三(林任期)・第四の任期に入るための制限をさまざまに定めることによつて、社会生活の基礎の崩壊を防いだのである。

#### 第八章「政治のなかでのバラモン」

マウリヤ朝の滅亡とシュンガ朝の成立を、H・P・シャーストリは異端派王朝に対するバラモンの反抗・勝利として捉えた。この説にはH・ライチョードウリの反論があるが、彼の執拗な反論にもかかわらず、アショカ<sup>アッシュカ</sup>の社会・宗教政策が正統派や保守派の人々の不満と憤りを呼んだことは疑いない。マウリヤ朝崩壊後に興った諸王朝は、シュンガ朝、カインヴァ朝、サータヴァーハナ朝、ヴァーカータカ朝、カダンバ朝など、バラモン系の王朝が多く、そのもとでヴェーダの大供儀の復活がみられた。一方、マウリヤ朝末期から侵入をはじめた異民族は、まず仏教に心を寄せた。正統派バラモンは、はじめ異民族に対して嫌悪感と抵抗とを示したが、やがて、新正統派の発達とともに、彼らを受け入れる門戸を拡げた。インド人は、軍事的・政治的には外来民族の侵入を阻止できなかったが、新正統派は彼らを社会的・宗教的に包容し同化させることに成功したのである。その他、この時代における政治・宗教上の重要問題を幾つか挙げるならば、デカンに興ったサータヴァーハナ朝が新正統派の信仰や社会制度を南方に広める上で大きな役割を果たしたこと、グプタ朝の

もとで新正統派が民族宗教として確立をみたこと、バラモンの中には大臣・官吏・軍人・国王などとして政治・軍事に参加する者も多かったこと、バラモンの政治・軍事への参加は聖法に違反するものであったが、危機(この場合は伝統文化・伝統社会の危機)に際しては武器を取り得るといふアーパドゥルマ<sup>アパドゥルマ</sup>がバラモンの政治・軍事への参加を容認する理論的根拠となったこと、バラモンに対する土地施与が、バラモンの居住分布を拡げ、辺境地における文化的同化<sup>アソカ</sup>を促進したこと、などがある。

#### 第九章「結論」

各章の内容は、おおよそ以上のようなものである。右の紹介から明らかなように、本書では西暦前二〇〇年から西暦後五〇〇年に至る時代が、一括して新正統派形成の時代として捉えられている。著者のいう新正統派とは、本来の正統派であるヴェーダの宗教(いわゆるバラモン教)の発展形態で、一般にヒンドゥー教と呼ばれる宗教を意味している。そして著者によれば、この新正統派とそのもとにおける新社会秩序の形成は、異端派・外来民族・非アーリア部族民などによる挑戦に対抗してバラモンが試みた、正統派復活のための努力の結果であるという。すなわち、バラモンはヴェーダの權威を形式的に強調する一方で、現実には非ヴェーダ的信仰の諸

要素の統合・融合 (assimilation, synthesis, synchronization, identification) を推進し、また、ヴァルナ階級主義の理想を掲げて社会の再編成 (systematization, standardization) を図ったというのである。

著者が使用した史料は、二大叙事詩(とくに『マハーバーラタ』)、プラーナ文獻、ヒンドゥー法典類、仏典、文学作品、碑文、貨幣など広範囲に及んでいる。また扱われる事項は、いずれもヒンドゥー文化、ヒンドゥー社会の形成に関係する重要問題であり、例えば本書で数ページに圧縮して述べられている聖地巡礼や寺院信仰の問題をとっても、それぞれ大冊の個別研究を必要とするものと言える。個々の論点についてみれば特別な新見解が提示されているわけではないが、著者は従来の研究成果を批判的に摂取するとともに、具体例を挙げつつヒンドゥー文化と社会形成の上にバラモンが果たした役割を総合的に論じ、また今後深められるべき研究課題をさまざまに指摘している。本書の価値はこの点にある。史料の引用がやや雑然としており、また反復の多い点が気になるが、所論は全般的に穩当なものである。

なお、著者は仏教をもって異端派を代表させ、仏教と正統派との対立に焦点の一つを当てているのであるが、その仏教の扱いにやや不十分なところがみられる。例えば、新正統派形成期(後マウリヤ期)の社会と宗教の実態を全体的に捉え

るためには都市と商業(およびそこに基盤を置く仏教)の問題をより深く考察する必要があるように、また新正統派のバクティ信仰が大乗仏教の興起を促したという重要な指摘があるが、深く追求されず、簡単な言及にとどまっている。また、アーパドダルマ、四任期、ヴァルナ間混血理論の成立を後マウリヤ期とみるのは、時代を下げすぎているが、この点は、この時期に理論的な「完成」をみたという意味に捉えるならば、さほど問題はなからう。

本書は、バラモンが主導権をもって推進した宗教改革運動を論じたもの、換言すれば、バラモン正統派の立場からみたヒンドゥー教成立論である。これは現存の文獻の多くがバラモンの手で書かれたものであることにもよるが、一方、逆の立場から見たヒンドゥー教の成立論、すなわち、雑多な非アーリヤ的信仰が、バラモンとヴェーダの宗教を包み込み混成宗教「ヒンドゥー教」を成立させてゆく過程の解明も、試みられて然るべきであろう。

Govind P. Upadhyay, *Brahmanas in Ancient India, A Study in the Role of the Brahmana Class from c. 200 B.C. to c. A.D. 500*, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi, 1979, xxiii+273p.